特　集

五感を使って鑑賞する

鑑賞の授業では，作品をさまざまな視点から捉え，
新しい見方や感じ方を体験させることが求められます。
本特集では，彫刻作品を見たり，さわったり，においをかいだり，
五感をフルに使って鑑賞していきます。
さて，授業の中で生徒たちの見方や感じ方は，
どのように広がっていくでしょうか。

撮影 鈴木俊介

授　業　リ　ポ　ー　ト

見て，さわって，鑑賞しよう!

北海道旭川市立北星（ほくせい）中学校
庄子展弘（しょうじ のぶひろ）先生 × 2年2組（生徒数37名）



日本を代表する彫刻家・中原悌二郎（なかはらていじろう）が幼少期を過ごした北海道旭川市は，「彫刻のまち」として広く知られている。市内に「中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館」（以下，美術館）があり，まちを歩けば至る所で野外彫刻を目にすることができる。

美術館では，10年以上前から「彫刻巡回展示」という取り組みを行っている。所蔵している作品を市内の小・中学校に一定期間貸し出し，鑑賞教育に役立ててもらうというものだ。今回は，美術館から同じ作家の作品2点（下参照）を借りて，鑑賞の授業を行った。

彫刻をさわってみよう

「あれ？ 何だろう」

「何か置いてあるよ」

美術室に入った生徒たちの目は，黒板の前に置いてある，布で覆われた2点の彫刻にくぎ付けだ。

「今日は美術館から彫刻を2点お借りしました。1点ずつ鑑賞していきますよ。では，まずこちら」と言いながら，庄子先生は彫刻を覆っていた布を勢いよく外す。

「おおっ！」

本物の作品を目の前に，生徒たちからは歓声が上がり，思わず全員が拍手。

「皆さん，この彫刻は何でできているかわかりますか」と先生が問いかけると，「銅かな」「金ではないよね」と次々と意見が出される。

先生は彫刻の制作過程を示したパネルを見せながら，作品の素材がブロンズであることや，そのつくり方について丁寧に説明した。

「今回は，この彫刻を自由にさわって鑑賞します。360度さまざまな方向からこの彫刻を見て，さわってください。作者がどんなふうにつくったのか考えながら，両手でさわってみるのもいいかもしれないですね」。

先生がそう話すと，生徒たちはワーッと作品の前に集まり，うれしそうに彫刻をさわり始めた。

全員が作品をさわった後，先生はこう切り出した。「さあ，皆さん，さわってみてどうでしたか。気づいたことを発表してください」。

今回，授業で取り上げる作品

いずれも北海道出身の彫刻家・山内壮夫（やまのうちさお）（1907-1975）の作品。山内は，母子像や人物群像を数多く残している作家である。「ソンミの慟哭（どうこく）」は，ベトナム戦争で起きたソンミ村虐殺事件をテーマにしている。中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館に所蔵。



「親子像」 ブロンズ
66×34×17cm　1955年



「ソンミの慟哭」 ブロンズ
34×48×8cm　1972年

生徒たちは思い思いに感想を述べていく。

生徒１「すごく硬いと思った」
生徒２「見た目はツルツルしてそうだったけど，さわってみたら，意外とデコボコしていた」
生徒３「冷たかった」
先生「硬い，デコボコしている，冷たい。他にはありますか。さっき，さわりながらにおいのことを話している人がいたよね」
生徒４「手が金属くさくなった」
生徒５「鉄くさかった」

先生は生徒たちの発言を繰り返して確認しながら，板書していく。そして，作品全体を指し示して「では，これは何に見えますか」と問いかけた。生徒たちは口々に「人だよね」「人にしか見えない」と発言する。

先生「では，どんな人なんだろう」
生徒６「組体操している人」
先生「何人いるの？」
生徒６「二人」
先生「じゃあ，前に出て，この人とこの人って説明して」



「二人で組体操している」と話し，作品をさわりながら，自分の見方を説明する。

指名された女子生徒は，「この部分が一人目で，この部分が二人目」と，作品の部分をさわりながら説明をした。「組体操をしている」という意見の他には，「じゃれ合っている」「二人は支え合っているんじゃないか」「三人にも見えてきた」などの意見も出され，授業はどんどん盛り上がっていく。

そこで先生は，ついに作品名を口にする。「この作品は『親子像』といいます。さあ，親子だとしたら，どんな親子に見えますか」。

生徒７「（作品をさわりながら）私は，三人の親子だと思う。これ（左部分）がお父さんで，これ（右部分）がお母さん。真ん中が子ども」
先生「どうして，これ（左部分）がお父さんだと思うの？」
生徒７「いちばん大きいから」
生徒８「僕は二人の親子に見える。お母さんが子どもをおんぶしているんじゃないかな」
先生「おんぶしているって，どんなふうに？」
生徒８「（おんぶのポーズをとって）こんなふうです」



「こんなふうにおんぶしていると思う」と言いながら，ポーズをとる。

腰をくねらせて「おんぶのポーズ」をとる男子生徒に，どっと笑いが起き，教室はますます明るい雰囲気に。

先生があえて作品名を告げたことで，作品の見方がより具体的になった。また，作品にふれて説明したり，身体化したりする中で，生徒たちの見方が深まっていったようだ。

そして，先生は「二人の場合も三人の場合もあるようだけど，つまりどんな親子なんだろう」と，再び投げかける。すると，生徒たちからは，「仲むつまじい親子だと思う」「けんかするようには見えないよね」などの意見が出された。



特集
五感を使って鑑賞する

比べてみよう

次に，二つ目の作品の鑑賞に移る。「ソンミの慟哭（どうこく）」という，戦争で苦しむ母子をモチーフにした作品だ。

先生は「次の作品はこれです」と言いながら作品を覆っていた布を外し，「さっきの作品とどう違うか，比べながらさわってみましょう」と促した。そして，生徒全員がさわった後，「さっきとさわり心地はどう違いましたか」と問いかけた。

生徒９「こっちのほうが硬く感じた」
先生「『親子像』より硬い。他には？」
生徒 10「でっぱりが多い」
生徒 11「なめらかさがない。ゴツゴツしている」

先生は「硬い」「でっぱり」などの言葉を板書。そして，さわった感想が出そろったところで，「ではこの作品は何を表しているんでしょうか」と投げかけた。すると，一人の男子生徒が前に出て説明を始めた。

生徒 12「女の人が寝そべっていて，その上に重なって人が寝ている」
先生「二人目はどの部分なの？」
生徒 12「（左部分を指して）ここです。この出っ張ったところが，二人目の腕なんじゃないか。こうやって（反り返るポーズをとって），イナバウアーみたいな姿勢で重なって寝ている。二人で昼寝をしているんだと思う」

先生は「ここにも注目してほしい」と，作品の中央部分を手で押さえた。





左／「この女の人の上に，もう一人が重なって，昼寝をしている」と説明する生徒。
右／「どうして穴が開いているんだろう」と先生は問いかけた。

先生「ここに大きな穴が開いていて，手が置いてありますね。どうして穴が開いているんだろう。なぜ手を置いているのかな」
生徒 13「何か隠している」
先生「何を？」
生徒 13「何か…… 何だろう……」
先生「隠すってことは，大事なものなのかな」

そして，この「大事なもの」という言葉が呼び水となり，生徒たちの発言は，主題に近づき始める。

生徒 14「おなかに穴が開いていて，その周りが膨らんで見える。女性が妊娠して，子どもを出産したから穴が開いているんじゃないか。だから，二人目は子どもだと思う」
先生「表情も見てみて」
生徒 15「目がつり上がっているように見える」
先生「どんな気持ちなんだろう？」
生徒 15「つらい…… そうとうきついんじゃないかな」

生徒たちは，徐々に母子の気持ちにまで思いを巡らし，さまざまな発言をしていく。先生は板書した後，作品名，作品のテーマとなったベトナム戦争のソンミ村虐殺事件について説明した。

「『親子像』と『ソンミの慟哭』は，どちらも山内壮夫（やまのうちたけお）さんという人の作品です。同じ作者の作品でも，見たりさわったりする中で，違う印象を受けましたよね。これから，自分が気になったほうの作品を選んで鑑賞文を書いてもらいます」と告げた。

授業の展開（全1時間）
生徒の活動

- **5分** **作品との出会い**
  「親子像」をさまざまな角度から見たりさわったりする。
- **10分** **鑑賞**
  「親子像」を鑑賞する。
- **5分** **作品との出会い**
  「ソンミの慟哭」を「親子像」と比べながら，見たりさわったりする。
- **10分** **鑑賞**
  「ソンミの慟哭」を鑑賞する。
- **20分** **鑑賞文を書く**
  2点の中から1点を選び，鑑賞文を書く。

評価規準
- 彫刻作品に親しみ，造形的なよさや美しさを味わおうとしている。（美術への関心・意欲・態度）
- 形や色彩の特徴，触感などをもとに，対象のイメージを捉え，彫刻作品に込められた創造的な表現の工夫を感じ取り，自分なりの意味を生成している。（鑑賞の能力）



真剣な表情で鑑賞文を書く生徒たち。

鑑賞文を書こう

鑑賞文を記入するワークシートが配られ，生徒たちは黙々と鉛筆を走らせる。

「黒板にはみんなが出してくれた言葉をまとめましたので，参考にしてください。作品をもう一度さわってみてもいいですよ。なぜ自分の心に残ったのか，根拠を明確にして書くようにしてくださいね」。

先生がそう促すと，前に出て作品をさわって確認したり，黒板の言葉を見ながら，友達と意見を交わしたりする生徒も。先生はこまめに机間指導を行い，書く手が止まっている生徒に助言をする。

そして，20分経った頃に「では，最後に発表をしてもらいます。Uさん，お願いします」と，一人の女子生徒を指名した。Uさんは次のように発表をした。

「私は『ソンミの慟哭』を選びました。戦争当時の苦しみやつらさが感じられる作品だと思います。苦しそうな顔をしているし，おなかの部分には大きな穴が開いているので，母親はそうとう大事なものを失ったのだと思います。子どもも苦しそうな表情で，体勢もつらそう。見ているだけで，こちらまで苦しくなってきます。手ざわりも硬くゴツゴツした感じで，色もどちらかというと黒に近い。『苦しさ』『つらさ』というイメージが強い作品だと思いました」



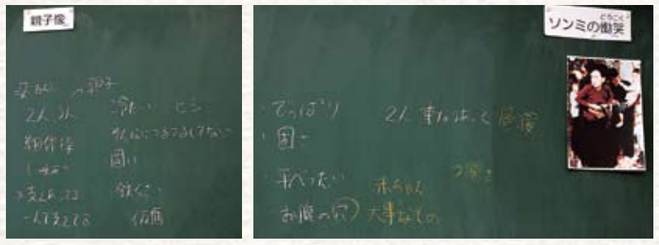
「ソンミの慟哭」について，鑑賞文を発表するUさん。

時間の関係で，発表は一人しか行えなかったが，多くの生徒がA4のワークシートをびっしりと文字で埋めていた。

そして，先生は最後にこう話した。

「旭川市内には100基近い野外彫刻があり，山内壮夫さんの作品も9基あります。今度，見かけたら，ぜひさわってみてください。そうすると，見ただけではわからないことがたくさんわかり，見方が深まります。そうやって，彫刻作品を味わっていってくださいね」。

生徒たちは，先生の話にじっと耳を傾けつつ，二点の彫刻作品を見つめていた。



板書を活用して

庄子先生は，鑑賞の授業で，板書を活用するようにしている。今回は，黒板を二つに区切り，「親子像」「ソンミの慟哭」で出た意見をそれぞれまとめた。
生徒が自分なりに考えた意見は黄色のチョークで書くなど，生徒の意見を分類して板書するようにしている。

私はこう感じました

生徒たちが書いた鑑賞文の中から，特に印象深かったものをご紹介します。

親子像



Iさん

家族で支え合って生きている様子が表された作品



なめらかな手ざわりと優しい色で，やわらかい雰囲気が出ているところが好きです。また，全体的に丸い形で角ばったところがないのも好き。

私は，子どもを背負った母親とそれを見る父親の姿に見えました。デコボコが少なくて，なおかつ切り離されていないところが，親子のつながりを表していると思います。つながっている部分の間にある穴も，家族のつながりのようなものが表されていると思います。とても仲がよいように見えます。

顔などが彫られていないのは，見る人に，どんな表情か想像してほしいという作者の意図があるのかなと思いました。私は「全員笑顔」と想像しました。

「ソンミの慟哭」とは対極の作品だと思います。父親と母親が手を取り合っているように見えて，家族で支え合って生きている様子が表されていると思いました。

同じ作者の動物を彫った作品を見たことがあるけれど，今日見た作品は，それとは違う雰囲気でした。

金属でつくられているからさわると冷たいけれど，どこかに温かさがある作品だと思います。



ソンミの慟哭



Hくん

戦争の痛々しさが表現された悲しい作品



手ざわりがザラザラというかゴツゴツしていて，さわると少し痛い。おなかの穴を押さえている手が不思議で，最初に見たときは作品名が思い浮かばなかったです。でも，母親みたいな人の足のところに，小さい赤ちゃんのような顔がありました。よく見てみると，おなかが少し膨らんでいて，そのおなかの穴から細長いものが出ていてその先に子どもの顔があったので，「出産」という作品名だと思いました。

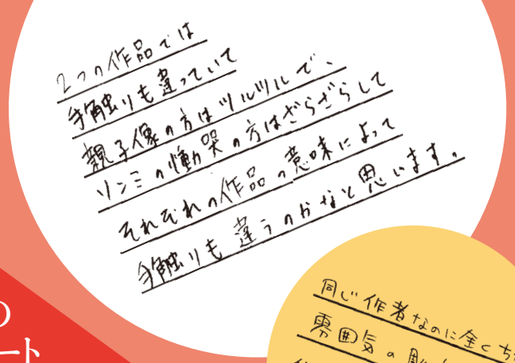
先生の話を聞いて戦争がテーマだということを知り，納得できました。なぜなら，母親の顔が苦しそうだし，おなかの穴も何か残酷な感じがするからです。

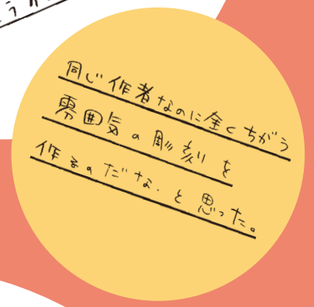
子どもも苦しそうな顔をして上を見ているので，母親は妊娠しているときに戦争で殺されてしまって，子どもも一緒に死んでしまったのではないかと思いました。

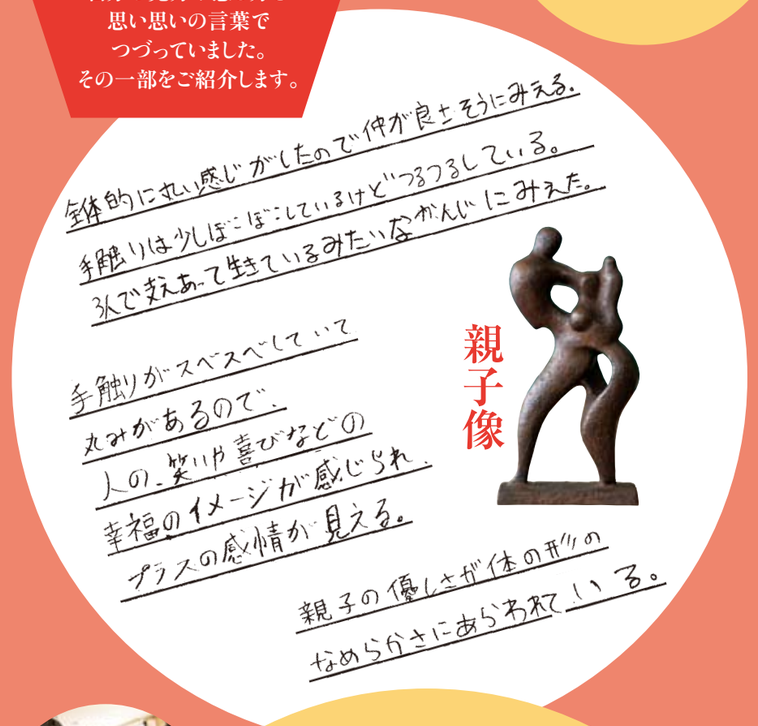
「親子像」よりも，ゴツゴツしているから，作者はそういうことで戦争の痛々しさを表現しているのだと思いました。そういう観点で見てみると，こっちまで悲しくなってしまう作品だと思います。

生徒のワークシートより

生徒たちは，
自分の見方や感じ方を
思い思いの言葉で
つづっていました。
その一部をご紹介します。











授業を終えて
——さわって感じたことを大事に

彫刻作品を鑑賞する場合は，絵画作品のときと違い，たくさんさわらせ，そこから感じたことを大事にするようにしています。さわったときの印象から，生徒の見方を広げたり，作品の主題に迫ったりすることができるからです。

私は，鑑賞の授業を行った後，必ず短い鑑賞文を書かせるようにしています。どうしてその作品に心ひかれたのか，根拠を明確にしながら自分の考えをまとめるには，文章に書かせるのがよいと思うからです。

今回は鑑賞文を書く時間を長めに取ったこともあり，ワークシートの裏側までびっしり書いている生徒がいました。それだけ，自分なりの見方で作品を鑑賞することができていたのだなと思い，うれしくなりました。

旭川には野外彫刻がたくさんあります。今日の授業を機に，生徒たちがそれらの作品を身近に感じてくれたらいいなと強く思います。



庄子展弘
しょうじ・のぶひろ
1968年北海道生まれ。旭川市立北星中学校教諭。
北海道教育大学旭川校卒業。
北海道ではいち早く対話による美術鑑賞に注目し，
2004年の北海道造形教育研究大会において，
「森の掟」（岡本太郎），「刈田」（徳岡神泉）
を題材として対話による鑑賞の授業を行った。
08年の第3回美術鑑賞教育フォーラムにおいて
提言発表を行った。

特集
五感を使って鑑賞する



授業を参観して

光村図書中学校『美術』の著作者である上野行一先生に，今回の授業を参観していただきました。



上野行一
うえの・こういち
大阪府生まれ。帝京科学大学教授。
大阪教育大学大学院修了。
広告デザイナー，公立学校教諭，
高知大学教育学部教授を経て2010年より現職。
著書に『私の中の自由な美術』（光村図書）など。
NHK高校講座「芸術（美術Ⅰ）」の
番組の監修を務める。
光村図書中学校・高等学校
『美術』教科書の著作者。

価値意識を育てる〈学びのしかけ〉

中学校第2学年及び第3学年の鑑賞の授業では，生徒一人一人が作品に対する価値をつくり出し，自分の価値意識をもって批評し合うようにすることが大切です。そのためには，生徒が自分の中に作品に対する価値をもてるようにする指導の工夫＝〈学びのしかけ〉が求められます。庄子先生の授業から〈学びのしかけ〉を探ってみましょう。

まず，授業構造に工夫が見られます。この授業では，同一作家・同一技法のブロンズ像でありながら，対照的な作品を対比鑑賞します。そのことによって生徒は，より明確に作者の心情や意図と表現の工夫について感じ取ることができるのです。

次に指導過程ですが，庄子先生の授業では，まず生徒に気づいたことを語らせます。思いつきでなく，根拠を明らかにして語ることが大切です。そして，互いに語り合うことによって，自分が気づかなかった作品のよさや見方に気づいたり，同じものを見ても多様な見方があることに気づいたりするのです。

しかし自由に語るだけでは，話題が散漫になったり，表層的な話題に終始したりすることもあるでしょう。作者の心情や意図を感じ取ることが学習目標であれば，そのような鑑賞を促す指導過程を工夫する必要があります。この授業で庄子先生は題名を提示したり，「ここにも注目して」と見る部分を指示したりしています。「ソンミの慟哭」を見て，最初「子どもの口が開いていたので，元気に生まれたところ」と感じていたOさんは，題名を聞いてもう一度作品を見直します。すると，母親の顔はもちろん，子どもの顔まで苦しみや悲しみを訴えているように見えたと言います。そして，「おなかに開いた穴は銃で撃たれてしまったからではないか」と考え，「おなかにいた赤ちゃんが死んで，あんなに悲しい苦しい顔をしているのではないか」と考えたのです。Oさんは作者の意図と表現の工夫を感じ取ったのではないでしょうか。

三つ目の学びのしかけは，板書の活用です。美術の授業では板書はあまり重視されていません。研究会などで話題になることもまずないでしょう。P6の板書の工夫に気づかれたでしょうか。「ソンミの慟哭」について，「でっぱり」「平べったい」などさわって感じたことが左端に縦一列で書かれています。その右の列には「二人」「赤ちゃん」など見えたものが，そして右端の列には「昼寝」「つらさ」など思ったことが書かれています。生徒の鑑賞を「触覚」「視覚」「考え」に分類し，黒板の上で構造化しています。

そして四つ目は，授業のまとめとして鑑賞文を書くことです。生徒一人一人が自分の価値意識に沿って作品について，また授業で学んだことについてまとめるのです。鑑賞文にはその子が何を考え，何を学んだのかが記されますから，評価の観点からも貴重な資料となります。

言いたいことを言いっぱなしの授業では価値意識は育ちません。生徒の学びを生み出すしかけを意図しておくことが大切なことです。